

ホトギス

十一月号

ホトギス

昭和二十一年三月二十日発行
全四冊年十一冊一月一冊発行
（第一冊）二百五十四頁
（第二冊）二百五十四頁
（第三冊）二百五十四頁
（第四冊）二百五十四頁



風雅の小筥（五十七）

廣太郎

平成七年一月十七日に勃発した阪神・淡路大震災により、淡路から阪神間一帯が大きな災害を被った事は現在でも語り継がれているが、当時の関東地方でも、近々起こると言われていた東京直下型の地震を始め関東地方に甚大な被害をもたらすと言われる震災への備えが問題視されていた。ホトトギス社が事務所を構えていた丸ビルは大正十二年二月に完成し、同時に当時のホトトギス発行所が逸早くテナントとして入居した事は以前にも述べたが、その年九月一日の関東大震災には耐えて、阪神・淡路大震災クラスの地震には充分耐えたと、当時言われていたが、改めて調べてみると、やはり築年数も経っており、ある日突然建て替えが発表されたのである。当然ホトトギス社も、少なくとも建て替えている間は別の場所に移らなければならぬ。ただ、これはオーナー側の都合であるので、色々便宜を図ってもらえる事になった。今思い出してみると、私も関西から出てきて、ホトトギス社でしか仕事をした事が無く、毎日家と丸ビルとの往復で、丸の内の中でも、どこにどんなビルがあるのかあまりよく判らなかつた。そんな中オーナー会社が提示して来たビルが、同じ丸の内の中にある「東銀ビル」という建物の中の五二〇区という部屋であつた。丸ビルの住所が千代田区丸の内二一四一であるのに対してこのビルは同じく千代田区丸の内一四一二と、鏡に映したような番地である。オーナー会社が意識したとも思えないが、何か縁も感じて、部屋も丸ビルよりかなり広いスペースとなり、早速契約する事となつたのである。

廣太郎旬帳 廣太郎

令和三年十一月三日 NHK文化センター

木の実落つアスファルトでふ褥かな
朝寒を発ちうそ寒に着きにけり
虫の音の終の一声地に還る
十一月四日 蕉心会

極楽の文学に秋惜みけり
水澄みて鯉の囁き聞え来る
姦しき鳥語秋突き抜けて
秋蝶の草の高さに紛れゆく
秋天を一筆書に鶯の舞ふ
銀に日を弾ませて秋日傘
露けしや英語で俳句作る子等
十一月七日 野分会芦屋例会

京都 駒鳥丸口や酢莖の香
山門に大書されたる親鸞忌
十一月七日 青嵐会芦屋例会
達磨忌や片目の達磨焼かれをり
寒竹の子を握る白き手先かな
十一月八日 朝日カルチャー若草句会

よちよちと落葉蹴散らす孫の靴
冬めいて母の眠りは浅くなる
小六月干物空をき通ひ切り
冬めいて街騒の透き通ひゆく
十一月十一日 土筆会

冬めきて一閃 天地裏返す
蓮根掘る備前の土を知り尽し
隼の飛ぶ上に星侍らせて
名園の松の走り根冬めける
一つ松冬めく高さありけり
十一月十二日 「俳句界」投稿欄選者競詠

名園の中に酒亭や冬うら
武士の魂を宿して枯蓮
凍滝の中に命の鼓動秘め

老松の黒々と冬立ちにけり
枯芝の底に育む命かな
石路の花一と色に景改る
大綿の空より青く消えゆけり
十一月十二日 「円紅」新年号出句

日弾きつつ冬紅葉冬黄葉
冬日和雲消してゆく刹那かな
江戸の世の語部として園小春
大綿の蒼天と色分ち合ひ
冬蝶の午後の日差を便ひ切り
十一月十四日 関西ホトギス同人会 大会投句のみ

秋天を切り取つてゐるピルの先
対岸の紅葉蒼天統べをり
赤き皿寒竹の子の躍り出す
小春日の外出は母の車椅子
落葉籠一杯にして下山かな
日輪の朝の角度に石路日和
伝統を守り継ぐ人の木の葉髪
十一月十五日 北國文芸選者吟

大綿の魂青く燃えてをり
十一月十八日 前議員句会
小春日に高層ピルの蕩けゆく
富士山をくつきり見せて小六月
小春月を浴びて雀の膨らめる
小六月山手線の軋みかな
十一月十八日 前議員句会新春号掲載

初明り街の輪郭和らげて
初電話孫饒舌となりゆけり
去年今年恙の人を見守りて
十一月十八日 登高会
竹林を輝かせたる冬日和

取壊れぬ山茶花庭を彩れる
瑠璃なき冬日和てふ天与かな
山茶花に古利の景の改る
一枚の枯葉梢を統べてをり
十一月十九日 廣邦会
大綿の空より青く消えゆけり

大綿の魂遊ばせてゐる虚空
木の葉髪ゲートボールの声高く
十一月十九日 ひまわり俳壇新年号選者あいさつ
水鳥の水に魂預けゆく
十一月二十一日 関西ホトギス同人会 大会

鳴くもの絶え冬ざれの北の原
黄落を踏めば命の音色かな
大綿のふはり姫の化身とも
三瓶の未来へと抱く冬芽かな
子三瓶の稜線 凛と冬紅葉
曇天を押し上げてゐる枯尾花
冬霧に三瓶標高奪はる

雨脚に色を足しゆく冬紅葉
樽の中ワイン冷たく吹ける
十一月二十三日 若水句会
芭蕉忌や今日も花鳥を友として
時雨忌や湖北暗めて涙雨
汀子句碑文字くつきりと小六月
十一月二十四日 目黒学園句会

夕時雨三井の晩鐘くぐもれる
山茶花の白見上りつて庭手入
神波出雲は今日も雨だつた
神波地上の柳を解きゆく
時雨傘畳み祇園の灯に紛れ
十一月二十五日 徳源寺句会
小春日を弾き返して摩天楼

降り立ちて尾張の小春纏ひけり
魂の終の輝き 枯葉舞ふ
一枚の枯葉に通き地の息吹
十一月二十八日 青嵐会東京例会 選者吟
大綿を現に放ちゆく虚空

返り咲くつじに羽音乏しかり
枯尾花揺れて揺れざる水面かな
十一月二十八日 野分会東京例会
僧の列報 恩講の威厳かな
十月三十日 カトリック新聞選者吟
東京の坂尽きるまで小六月

雑詠 廣太郎 選

師の気配あるらし花の蔵王堂 横浜 高浜礼子
 面影を追ひつつ花の吉野へと 同
 花を愛で師の追憶の旅終る 同
 蝶高く飛べばはかなきものならず 東京 岩村恵子
 天空は横へも無限樟若葉 同
 野に熟れしもの食み新茶甘きかな 同
 父逝きし春愁の闇ひたひたと 同 伴 統子
 春愁や父の書齋の黙深し 同
 掛軸の父の字清し春惜む 同
 殉教史播く碑文冴返る 京都 山崎貴子
 日本に虚子大空に花万朶 同
 虚子忌てふ宇宙よりなほ重きこと 同
 飛火野へ行くと別れて若葉道 大阪 酒井湧水
 平城の楓若葉に休む車夫 同
 今日何もかも新緑に悼みけり 同
 草笛や能楽堂のあたりより 神戸 和田華凜
 文末にかしこと書きて花あやめ 同
 花入に有馬籠もて風炉点前 同

春の闇へと深入りをしてみたく 西宮 本郷桂子
 葱坊主帰郷してよりのただの人 同
 先住の犬に甘ゆる子猫かな 同
 新豆腐うすももいろの塩すこし 香川 湯川 雅
 交叉する鯉の曲線水澄める 同
 浮くはずの無きもの浮かべ秋出水 同
 静心もて粽解く指の先 東京 田丸千種
 一本の紐と化したる粽解く 同
 香の立ちて日の斑風の斑若葉の斑 同
 降臨の杜降誕の鹿の子守る 龍ヶ崎 今橋眞理子
 神代より神と仰がれ樟涼し 同
 天を衝く千年杉の秀の涼し 同
 全身を風すべり落つ籐寝椅子 長岡 安原 葉
 一花また一花鉄線風に咲く 同
 一枚の窓染め上げて薔薇の雨 同
 梅椿虚子恋ふやうに汀子恋ふ 神戸 藤井啓子
 汀子恋ひつつの虚子忌を老一人 同
 師を亡くし腑抜けし春も逝かむとす 同
 青空と新緑うつす朝の湖 静岡 須藤常央
 遠き日のふるさと恋し麦の秋 同
 一色の丘の起伏やラベンダー 同
 新茶汲む良きことひとつ思ひつき 熊本 岩岡中正
 更衣して似たやうな服ばかり 同
 解きやすきやうに結びて笹粽 同

雑詠句評（十月号より）

面影を追ひつつ花の吉野へと 加須 岡安紀元

汀子先生の面影であろう。毎年花の吉野を訪れ、仲間と句座を
楽しまれていた汀子先生。その頃に作者もご一緒されたのかも知
れない。満開の桜のようなオーラを纏われていた、汀子先生。そ
の面影を偲びつつ、花の吉野へと出向かれたのだ。その吉野の桜
の一景、一景に汀子先生の面影が重なっているであろう。（し
ぐれ）

吉野の旅は毎年汀子が楽しみにしていたが、亡くなる前の何年
かはコロナ禍で開催出来なかった。そんな汀子の面影を追いかけて
吉野の絶景の桜に思いを馳せている作者なのである。吉野の花
はこれからも咲き続けるのである。（廣太郎）

蝶高く飛べばはかなきものならず 鹿島 上迫和海

蝶ははかないものというイメージがあるが、高く力強く飛んで
いるのを見かけることもある。そういう時のふとした思いを、そ
のまま詠んだ一句。単純化がいい。（純也）

春の季題である蝶は、花が咲き誇っている中をふわふわと飛ん

でいて、確かに少し弱々しい感じもするが、時に風に乗って高く
舞い上がる姿を目にするが、そんな時の雄々しさを感じている作
者なのである。生命力を感じる。（廣太郎）

父逝きし春愁の闇ひたひたと 横浜 高浜礼子

松本圭二さんには生前大変お世話になった。中国地区の重鎮と
して、山口県の代表として欠かせぬ存在であった。また娘である
高浜礼子さんとの仲睦まじい姿も目に焼き付いている。そんな父
を亡くし身の回りから父の影が消えるには相当な時間がかかりそ
うだ。今夜も春愁の闇が襲って来るのだろう。（龍雄）

肉親、特に父母を亡くした時の悲しみは一人である、と言いた
いところであるが、実際筆者も経験してみると、その悲しみより
も先に色々な事に忙殺され、正に悲しみはその後ひたひたとやっ
てくるものなのである。（廣太郎）

日本に虚子 大空に花万朶 島根 猪俣北洞

大空に広がる花を見た時、虚子の「咲き満ちてこぼるゝ花もな
かりけり」という句が頭に浮かんだのではないだろうか。桜は季
題の中で最も重要なものの一つであり、又日本を代表とする花で
ある。そして俳句界を代表するのは、やはり虚子をおいて他には

ない。その二つを共に称えて、日本に生まれ俳句を作る喜びをかみしめているのである。(紀子)

虚子忌の情景を思い出すが、昨今のコロナ禍もありとんと春福寺は御無沙汰である。そんな中でも作者は毎年花の季節には虚子の偉大さを思い出しているのである。花が俳句の為に咲いているような雰囲気も感じる。(廣太郎)

今日何もかも新緑に悼みけり 大阪 酒井湧水

「悼む」とは、人の死を悲しみなげく、と広辞苑にはある。一方「何もかも」というと、人間以外のものも悼む、ということになるろうか。新緑を見るにつけ、そういった気持になるというのは理解できるが、句としては、やや言葉遣いが強引ではないか、というのが筆者の印象。(公次)

汀子の葬儀ミサの司式をして下さった作者の、汀子に対するこれ以上考えられない程の最上級の追悼句である。一見かの「今日何も彼もなにかも春らしく」を彷彿させるが、それが故に悼む心がひしひしと伝わってくる。(廣太郎)

草笛や能楽堂のあたりより 神戸 和田華凜

草笛ははるか昔から子供の手作り玩具として親しまれており、中世の文学作品にも言及があるそうである。簡単に鳴りそうで鳴

らないのが草笛であつて、その音色はさわやかで耳にするとどこどなく郷愁を感じ、若き日の頃を思い出すことが出来る。その草笛が、能楽堂の辺りから聞こえてくるというのであるから古来のつながりを連想させ、なおさらのことノスタルジアを感じさせる佳句となっている。(紀元)

これから能を鑑賞されるのだろうか。そんな時に、能楽堂の近くから草笛の音が聞えてきた。考えてみればこの音色は少し能管に近いのかも知れない。郷愁をそそる草笛に少しドラマも感じられ、能楽と重なる。(廣太郎)

先住の犬に甘ゆる子猫かな 本室府 持永真理子

犬は、子猫に為すがまま甘えさせている。動物好きの人にはその可愛さがたまらないのであろう。

家族として後から加わった子猫が、先住の犬にも一家にも、馴染んだという安堵。温かなそのご家族のやさしい眼差しが集まっているようだ。

子猫は見ているだけでつい笑顔になるが、それ以上に飼主さんの嬉しそうな笑顔が伝わり、何とも微笑ましい。(雅)

最近はいんターネットの動画サイトを見ると、よく動物、特に犬と猫の登場する動画が多い。犬と猫は一緒にすると喧嘩するよゆうな印象があったが、仲良くしている場面は多いだろう。子猫の可愛さは勿論、犬もほのぼのと描かれている。(廣太郎)